



カンキツの主要ウイルス病の発生生態と防除対策

東京農業大学 農学部 いわ岩 なみ波 とおる徹

はじめに

カンキツ栽培において問題となるウイルス病は、世界的にはステムピッチング病やソローシス (psorosis), レプローシス (leprosis) などを含む 10 種類程度が知られているが、日本で主に問題となるのは、温州萎縮病、接ぎ木部異常病、ステムピッチング病の 3 種類である。日本で発生するウイルス病の種類が海外に比べて少ないのは、海外からの苗木の移動が厳しく制限されているため、植物防疫体制が確立される以前に導入されたウイルスまたは元々国内にあったウイルスのみが発生しているためと考えられる。カンキツ栽培においては、糸状菌病には薬剤防除が有効な場合が多く、また、日本の主要カンキツ品種であるウンシュウミカンには主要な細菌病の 1 種であるかいよう病に対して比較的耐病性が高いため、一般的に糸状菌病や細菌病よりもウイルス病の被害が目立つ傾向にある。

我が国におけるカンキツウイルス病は、1970 年代以降、人気品種の急速な普及とともに汚染された穂木、苗木が出回り、人間の手で大発生を招いてきたという歴史を持つ。近年においては、苗木段階でのウイルス病の早期診断の普及やウイルス病についての啓発活動により、突発的なウイルス病の大発生という事態はほとんど見られなくなった。しかしながら、産地にまん延したウイルス病の一部は依然問題となっている。また、近年の温暖化と異常気象で圃場や産地が移動する際には、過去のウイルス病の記憶のない生産者もいるはずで、依然として警戒と啓発活動は重要である。本稿においては、我が国におけるカンキツの主要ウイルス病の発生生態を概括し、その防除対策について述べたい。

I 温州萎縮病

1 温州萎縮病とは

温州萎縮病は、主に我が国の主要カンキツであるウンシュウミカンで広く発生する (IWANAMI, 2022)。罹病したウンシュウミカンでは、春先の新梢に舟形葉やさじ型葉が発生し、節間が短縮して、樹全体が萎縮したような様相を呈する。果実の品質と収量は低下する (図-1)。イヨカン、ネーブルオレンジ、‘不知火’、‘せとか’、‘たまみ’などの中晩柑では、ウンシュウミカンほど被害が目立たない場合が多いが、健全樹に比べるとやはり生育や果実収量は劣る。日本の各地のカンキツ産地で発生するほかに、韓国、中国、トルコで発生するが、外国における発生は日本から持ち出された穂木、苗木由来であることが強く示唆されており、本病は日本独特の病害であると言ってよい。

本病は人気品種への拙速な更新が盛んに行われた 1970 年代～2000 年ごろまではたびたび大発生したが、近年では健全母樹の確保、簡易検定技術の普及と苗木業者および生産者の意識向上により、表面上は沈静化している。しかしながら、後述するように本病は土壌に定着し、徐々に周囲に広がるため、本病の発生圃場が急激に減ることはない。



図-1 温州萎縮病に罹病したウンシュウミカンの枝葉の症状

Epidemiology of Major Citrus Virus Diseases and Control. By Toru IWANAMI

(キーワード：温州萎縮病，接木部異常病，ステムピッチング病)